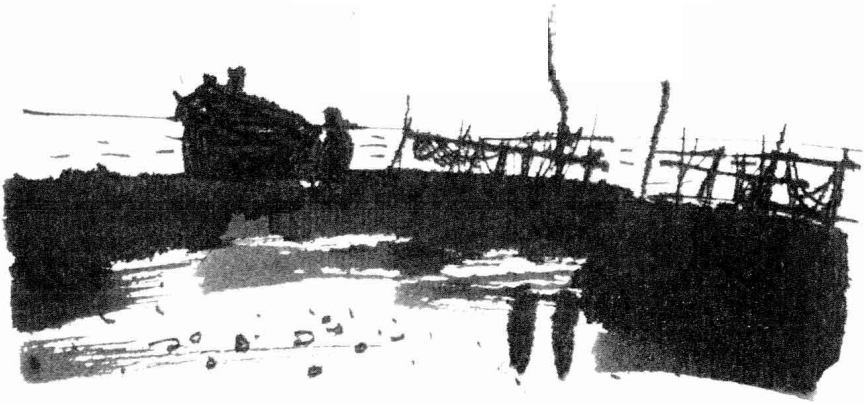
砂のつぶやき

千田夏光

砂のつぶやき

千田夏光



千田　夏光（せんだ　かこう）
1924年　大連に生まれる
毎日新聞記者を経て，現在，著述業。
主著『従軍慰安婦(正・続)』『従軍看護婦』『死肉兵の告白』『皇后の股肱』『俘虜になった大本営参謀』『あの戦争は終ったのか』『性的非行』『暴力非行』『皇軍〝阿片〟謀略』『終焉の姉妹（上・下)』『植民地少年ノート』『オンナたちの慟哭』『従軍慰安婦慶子』『くれない染めし草の色』ほか
現住所　〒136　東京都江東区亀戸2の6の3の602

砂のつぶやき

1982年5月25日　初　版　　定価980円

著　者　千　田　夏　光
発行者　松　宮　龍　起

郵便番号 151　東京都渋谷区千駄ケ谷3—11—8
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京（478）3311（代表）
振替番号　東京3—13681
印刷　壮光舎印刷　製本　小泉製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします．
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

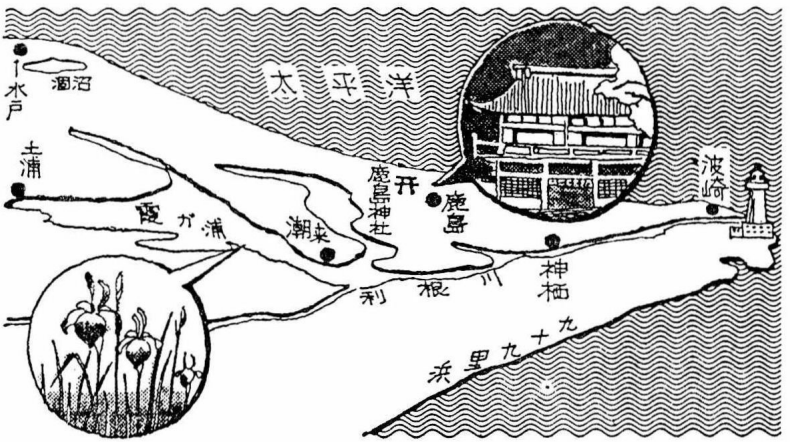
砂のつぶやき　目　次

〃黒沢義次郎の妻〃の話　5
〃ある情婦〃の話　72
〃鹿島町役場職員Bの妻〃の話　190
〃鹿島町に住む元、農民Cの妻〃の話　272

『文化評論』一九八一年一月号より同年十二月号まで連載

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

砂のつぶやき


太平洋
水戸
沼
土浦
霞ヶ浦
潮来
鹿島神社
鹿島
波崎
神栖
利根川
九十九里浜

〝黒沢義次郎の妻〟の話

私の名前でございますか？　マッと申します。片仮名で〝マ〟と〝ツ〟と書くのでございますよ。

えっ?!　年も申しあげるのでございますか？　あらあらどうしましょう、どうしても申しあげねばいけないのでございますか、それなら申しあげますけど明治三十五年二月十五日生まれでございます。本当はその年の正月に生まれたのに、昔の人はのんきだったのでございますね、二月十五日になってやっと役場へ届けたのでこうなったのだそうでございますよ。

明治三十五年と申しますと、そのころ、そうでございます、たしか一月末の二十五日か二十八日に、ほれ『八甲田山死の彷徨』の小説や映画で有名になりました青森県弘前連隊の兵隊さんたちが八甲田山で百九十七人凍死させられた事件のあった年でございますよ。生まれたばかりの私は、もちろん知るはずのない事件でございましたが物心つきましたころ父親がよく口ずさんでいました。

焼かぬ乾物に半煮え飯に
なまじ生命のある其のうちは
こらえ切れない寒さの焚火
煙いはずだよ生木が燻る

なんでもその事件の後にできました〝雪の進軍〟とか申す軍歌だとかでしたが、冬の夜、囲炉裏ばたでドブロクをのみながら一人で口ずさんでいるのでした。ろくろく防寒具をもたされずに零下何度の雪の山におくりだされたのだそうでございますね、凍死させられた兵隊さんたちは。「ひどいことするものだっぺ」うたい終わると父は茨城弁でそう申しておりました。

生家は、いまの、この鹿島町の西にあたります茨城県鹿島郡富里村田谷でございます。町村合併でいまは鹿島町になっております。畑作と養蚕で暮している農家で、六人きょうだいの長女に生まれたのでございます。土地では庄屋格の家でしたが、父も母もそれは働き者で、朝は暗いうちからコトコトと土間で今日一日つかう鍬や鋤をととのえている音、トントンと大根の葉っぱをきざむ音が聞えていました。いえ牛や馬のえさではございません。朝の味噌汁のみでございますよ、その大根の葉っぱが山盛りに入っている味噌汁と、ところどころ白い米粒のまじっているご飯が、きまって朝ご飯だったのでございますよ。

でも、小学校にあがりますと、もうそんな物音を寝床の中で聞いてすごすことは許されません。「マツ、マツや、朝だよ」父母といっしょに起こされ働かねばならないのでした。水汲みが一番つらい仕事でした。天秤棒の前と後に桶をつるし井戸とお勝手の間をヨタヨタ往復するのでございます。子供の足でせいぜい三十歩ほどの距離でしたが、冬の朝など鋭い霜柱が草履の底の藁のすきまをつきぬけ足の裏につきささるのでございますよ。手も足も〝しもやけ〟で赤黒く腫れましてね。

でもそんなの私だけ、私の生家だけのことではございませんでした。農家の子はどこでもそうだったのでございますよ。お蚕のときなど末妹を背中にしばり、水汲みのほかご飯炊き、洗濯、掃除、薪割りまで、お手伝いの人たちにまじってやりました。どこでもそれは子供の仕事なのでございまし

た。いまミスなんとかコンクールと申しますのをテレビで見ていますと、よく「お仕事は？」「家事手伝いです」など申されていますが、はじめのうち「家事手伝いをしていてどうして〝しもやけ〟ができていないのだろう」「どうしてあのように手足がツルツルしているのだろう」不思議に思ったものでございました。

本当の家事手伝いと申しますのは、昔はそれはそれはつらいものだったのでございますよ。誰もがやっている、やらねばならぬものだから、「つらい」と口にしなかっただけでございますよ。

しかし、それほど親も子も働いていますのに百姓というのは憐れなもので「今年の繭相場はいいですぞ、これまでの借金がまとめて返せますぞ」とか「娘さんに綺麗なべべが買ってやれますぞ」など蚕の種売り商人に吹きこまれますと、ついついコロリだまされてしまうのですね。蚕の種とは、蚕の卵のことなのですが、子供たちに綺麗な着物を着せたいばかりに、それをたくさん買いこみ、育てあげたところで「思わぬ生糸の大暴落」で買いたたかれるのですね。その繰り返しなのでございますよ。

わかっていますのに、毎年のことなのでそう言われるのはわかっているのに、だまされるのでございますね。

幾歳のときだったかはっきり記憶していませんが、小学校一年か二年だったと思います。夕方でした。真っ赤な太陽が北浦の西の森へゆっくり沈んでいくのを、鍬の柄に顎をのせじいっと、いつまでも見つめていた父のことを今も忘れません。頬に一筋光る糸がのびていました。夕焼けがそれを茜色に染めていました。妹を背に、三歳になる弟の手をにぎって私はその茜色の筋を見つめていました。

「……二度とひっかかるまいと思っていたのになあ……涙しぼる家がまた出るのだっぺなあ……」

「そうだっぺよなあ、わしらから繭買っている製糸会社の社長はどこでも御殿のような屋敷かまえ子供たちは皇族のいく学校へかよっていると言うのにな……」
「しいっ、そんなこと、お前、大きな声で言うものでない……」
「……」
夜半でございました。隣りのおじさんと父が話し合っているのを襖ごしに聞いたこともございます。聞きながら夕焼けに染まっていた涙は村の人びとのことに思いをいたす口惜し涙だったのだな、村の今年のお蚕はまた駄目だったのだなあと子供心に思ったのでございました。綺麗なおべべは今年もまたつくってもらえないと自分自身に言いきかせたのでございました。
畑ではサツマイモと麦をつくっていましたが、サツマイモの方は澱粉製造商人、飴の原料商人に売るのでしたが、これも、いつも都会の大きな会社のいいなりで買いたたかれてばかりなのでございました。父と隣りのおじさんは村人のそんな八方塞がりの思いを、ぶつける所もないまま、いま思えば愚痴りあっていたのでございますね。愚痴りあっているうち思わずとびだした自分の言葉に追いつめられたウサギのようにとびあがったのでございますね。
この鹿島と申します土地は、沖に黒潮がおしよせてきているためでございましょう。茨城県内でもっとも気候がよく、台風も不思議とそれて通る、台風の被害のすくないところなのでございますが、それでいて、ここに働く百姓はそんな生活だったのでございますよ。生家は自分の土地を耕して生きます、前に申したように庄屋格の自作農でございましたが、それでもそうなのでございました。ですから、地主に畑を借り年貢をおさめている小作農の家はもっと苦しかった、辛かったと思います。右から左からだまされてばかりいたのでございますからね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でも、今日は、私のそんな幼い時代のことを聞きに来られたのではないのでございましょう？

そうでございますよね、私の〝つれあい〟、黒沢義次郎のことを聞きに来られたのでございますよね。わかっております。義次郎が、鹿島町町長として、あの〝鹿島臨海工業地帯〟建設に反対、さいごはたった一人で「百姓の土地を二束三文でとりあげるな、百姓を大企業のエジキ、犠牲にするな」声をからし、ついにはおしつぶされた、その話を聞きに来られたのでございますよね。

さて、では、どこからお話いたしましょう？　なんでございますか、若い時のことから話せと申されるのでございますか。これは困りました。ほっ、ほっ、ほ、義次郎と私は奇妙な縁でめおとになったものですから。

それならその奇妙な縁のことから聞きたいといわれるのですか？　実を申しますとそのことは、これまで誰にも話したことはないのでございますよ。もっとも身内の者はみな知っておりますけど……困りましたね。でも黒沢義次郎と申します男を知っていただくには、そこからお話いたした方がよろしいのかも知れませんですね。よろしゅうございます。申しあげることにいたします。

大正七年だかに〝シベリア出兵〟と申す戦争がございましたのをご存知ですか？　難しいことは知りませんが、なんでもヨーロッパにおこった第一次大戦のゴタゴタと、ロシアで革命が成功して新しい政府ができ、できたばかりでまだゴタゴタしているすきをねらってシベリアを占領しようと日本がしかけた戦争だそうでございますよ。ところが十万人とかの兵隊を送ってもロシア人の抵抗が強くてうまくいかない。日本国内でも、いまの総合商社と申すのですか、あんな大金をもった商人が米を買占め大儲けをはかったことからおかみさんたちが立ちあがって米騒動をおこす。そんなことでニッチもサッチもいかなくなった政府は大正九年にシベリアから兵隊を引き揚げさせるのですが、そのころ

でございました。私に縁談があったのでございます。

相手の各前は黒沢直義。いえいえ義次郎ではございません。義次郎の兄でございます。直義が長男で義次郎は名前でおわかりのように次男なのでございました。

当時の縁談とは親が勝手にきめますもので、娘や息子はただ「はい、はい」それに従うだけでございました。結婚式から三日して初めて夫なる人の顔を見るなど少しも珍しいことではないのでございました。おかしゅうございましょう。ほっ、ほっ、ほ。結構それでうまくいったものなのですね。結婚式も今日のように神前結婚だヤソの教会だというものでございません。親戚の男か誰かに足もとを提灯(ちょうちん)で照らしてもらいながら、夕方、生家から相手の家までまいり、そこの座敷で三三九度の盃をくみかわす、それだけでございます。披露宴もそこで親戚が集まって食べたり飲んだりする、それだけでございました。今日のように派手になりましたのは百貨店やホテルがバタバタできてからでございますよ。

ま、そんなことで富里村田谷の生家から、この鹿島町清水の黒沢家へテクテク歩いて嫁にまいったのでございますが、ここまで申すともうおわかりのように、私が結婚しましたのは義次郎の兄の、直義だったのでございます。

それがまたどうして、義次郎とめおとになったのかと申しますと、それが、ここでも親の命令なのでございますよ。一年とたたぬうちにはやり病でポックリ直義が死にますと「義次郎を黒沢家のあととりにするから、お前はこの義次郎の嫁になれ」親たちが勝手にそうきめたのでございますよ。ほっ、ほっ、ほ、つまりでございますね、そんなことで私はこの義次郎とめおとになったのでございますよ。

おかげで三十何年かして、重要犯人のように刑事に尾行される、札束に狂った人たちから唾はきかけられるなどひどいめにあわされたのでございますよ。ほっ、ほっ、ほ。「今日からワシが夫だ、ワシと暮すと辛いことがあるかも知れないが覚悟してくれ」めおとになったときの義次郎の、それが一番最初の言葉で、それに「はい、わかりました」うっかり答えてしまったので、約束してしまったので、それもこれも辛抱いたしてまいりましたけどね。ほっ、ほっ、ほ。

ところでこの聟どの、知れば知るほど変わったひとなのでございましたよ。いえ、若い時からでございますよ。

こんなことがあったと申すのでございますよ。小学校を卒業、高等小学校へ通っていたころだそうです。少年雑誌に載っております冒険物語にうかれ「ワシは大きくなったら探検家になり世界の秘境を踏破するのだ」決心したというのでございますね。そこまではよく聞く話でございますが、あの人のはちょっとばかり違っていたのでございますよ。世界の秘境には灼熱の熱帯もあれば零下何十度の南極北極もある。そこを踏破するには灼熱にも極寒にもたえられる体をまずつくらねばならぬと考えるのでございますね。

ではいったいどのようにしてその体をつくろうとしたかと申しますと、まず山ほど薪を割り、とびあがるほど熱い風呂をわかすのでございますよ。「ウンウン」唸りながらそれを頭からかぶる。これが灼熱の熱帯にたえる訓練なのでございますね。ついですぐ井戸端に走っていって冷たい井戸水をザアザアかぶる。こちらを北極南極に見たてるのでございますよ。夏から冬にかけこれをやったのでございますね。

体をこれでは壊さないはずがございません。もののみごとに最後は風邪から肺炎をおこすのでござ

いますよ。昔の肺炎と申しますのは今日のように抗生物質とかいう特効薬はございませんから、胸にカラシ湿布をし、閉めきった部屋のなかに鍋や釜で水蒸気をたてるだけでございます。これも四日も五日もつづけるのでございますが、十人のうち四人か五人は死んだと申します。ところが、これでこりたかと申しますと、どうしてどうして、「船が難波したときの訓練だ」と、静かな日で子供の胸ほど、すこし荒れますと身丈をはるかにこえる大波がうちよせる鹿島の海岸で坐禅をくむのでございますよ。

荒海にも負けず、寒さにも負けず、
東に秘境あれば身を挺し、西に毒蛇
あればこれを征伐し……、

どこで憶えましたのか、なんとかと申す有名な詩人の詩を勝手につくりかえ唱えていたのだそうでございますよ。もっともこれは、その肺炎さわぎのずっと後だそうで、肺炎さわぎのときは、父や母がお葬式の相談までしたものだそうです。詩や短歌をつくりますのは高等小学校のときから好きだったようで、学校の図書室の本はほとんどすべて読んだそうでございます。有名な詩人の詩もそんな中で憶えたのでございましょう。ロマンチストと申す言葉がどんな意味か存じませんが、そのころ「義次郎さんはロマンチストだな」他人様からよく言われていたようでございます。

本当にどんな意味なのでございましょうねロマンチストとは、でもこのロマンチストのむちゃはまだまだつづくのでございますよ。

高等小学校を卒業しますと、「お前は次男だから工業学校へいって手に職をつけた方がいい」と申す叔父、「これからの時代はどうころぶかわからない、他人にだまされない学問を身につけるため中

学校へいけ」とすすめる父親の言葉をはねのけ、「国の本は農にありと申します、私は農業を学びすぐれた百姓になります、新しい農業を勉強し商人にだまされ、時代に苦しめられている百姓のため生涯を捧げます」と、茨城県で一番の水戸の農業学校へ進むのでございますが、そこでもやってくれるのでございます。

探検家熱はそのころなんとかおさまっていましたが、鹿島から水戸まで十二里半、今日風に申しますと五十キロあるのでございますが、「ワシは一直線に歩くのを人生の目標にする、曲ったことはしない、その精神を鍛えるため、この十二里半を一直線に歩く」と言いだすのでございますよ。言いだしたら誰がなんと申しても耳をかしません。水戸まで途中に森や林や山や川や沼がございますのに、それを真っすぐ一直線に歩くことをはじめるのでございます。

いえ、毎日ではございません。水戸農業学校は寄宿制でございますから月曜日から土曜日の昼までそこで過します。土曜日は授業が終わるとそのまま水戸駅に走り、常磐線で石岡駅か土浦駅にまいり、船で霞ヶ浦を潮来まできて家にもどりますが、その帰路でございます。日曜日の夕方、母にニギリ飯をつくってもらい、それをやるのでございます。山で猪におそわれたり、狸に逆においかけられたり、スズメ蜂の巣を蹴とばし顔をカボチャのように腫らしたり、沼でスッポンからオチンチンをかみつかれそうになったりしながら毎週それをやったのでございますよ。

水戸に着きますのは翌朝になりますが山でウルシにかぶれたときなど眼があきません。「こら！黒沢！　居眠りしてはいかん！」そんなときはよく先生に叱られたものだそうでございます。

それでもそれなりにおさまっていればそれですんだのでございますが、この水戸農業学校二年生のとき、こんどはとんでもない方向に足を踏み入れるのでございますね。とんでもない人の所に出入り

しはじめたのでございますよ。ご存知でしょうか、橘孝三郎と申す人でございますよ。

昭和七年五月十五日、乱暴者が犬養毅という総理大臣をピストルで殺し、警視庁や東京の変電所に爆弾をなげた事件がございましたね。そうそう、〃五・一五事件〃とよばれた事件でございますよ。海軍士官、陸軍士官候補生に民間の右翼だかが加わっておこした事件でございましたね。あの事件のとき民間人側の親方になった人でございますよ。なんでも水戸市の北に愛郷塾とか申すものをつくり、そこに塾生と申す若い者を集め、そうした考えを吹きこんでいたのだそうですが、ここへ近づいたのでございますよ。

塾の場所は正確には茨城県茨城郡常磐村とか申しておりましたが、橘さんが「農は国の本なり」と言っているのを人づてに聞き「おや？　ワシと同じこと言っている人物がおるらしい」と、まだ農業学校二年生の身でたずねていったのがはじまりだったのだそうでございます。橘さんは〃五・一五事件〃に参加したとき四十歳だったそうですから、そうでございますね、まだ三十六歳か三十七歳のころではなかったのでございませんでしょうか。塾生の中にはすこし兄貴分の矢吹正吾、塙五百枝など申す人たちがいたそうでございます。

この人たちは、後に義次郎が鹿島町長として、あの〃鹿島臨海工業地帯〃反対にたちあがったとき、農民のためのその反対闘争に水をさし、農民を裏切っていくのですが、「〃農は国の本なり〃と叫んだのはいつわりだったのか、〃農は資本家のもの〃なのか」と義次郎に口惜し涙をこぼさせるのですが、そのころは本気になってのめりこんでいったのでございますね。

あの人は水戸農業学校二年生の最後の三学期「どうもこの学校はワシの志すことを教えてくれない、ワシは鹿島にもどり自分で鍬をふるって自分自身の道をみつける」と退学してしまうのでござい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com